

# 意志の弱さと欲求の合理的評価

塩野直之  
福井県立大学

"Free Agency"においてゲイリー・ワトソンは、何かを欲するということには、それを価値あるものとして評価するという側面と、それが欲求すなわち動機としての力を持つという側面の二つがあることを論じた。またワトソンは同じ論文で、欲求を充足することと欲求を除去することの区別にも注意を促した。私は本発表で、第一に、価値評価と動機の区別というこの着想から、意志の弱さについてのいかなる特徴づけが得られるかを概観する。そして第二に、行為者が「自己コントロール」を発揮することによって、自らが意志の弱い行為に陥ることのないようにするという局面において、欲求を充足することと除去することの区別がいかなる役割を演じるかを論じる。

意志の弱い行為とは、われわれがある行為をなすべきでないとは判断しながら、その行為を行ってしまうことである。

デイヴィドソンは、「行為者がもし、yをするよりもxをする方がよいと判断するならば、その行為者は、yをするよりもxをすることを欲する」という原理を是認した。彼にとって「意志の弱さはいかにして可能か」がたいへん困難な問題となったのは、まさにそのためである。これに対してワトソンは、デイヴィドソンの上の原理を否定し、ある行為のよし悪しに関わる価値評価の判断と、その行為への欲求の動機としての強さを区別した。価値評価とは、元をたどれば、われわれがどのような人生をよいものとするかについての、冷静な思考に基づき長期的に安定した価値観に帰着するものである。他方、動機とは、当の行為者を実際の行為へと突き動かす力を持つものである。

上の区別を用いると、意志の弱い行為の可能性には、デイヴィドソンを悩ませたような特別な困難は存在しないことがわかる。行為者がある行為について、それをなすべきかなさざるべきかを判断するとき、行為者がその行為に対して与えるのは価値評価である。他方、行為者が実際にいかなる行為をなすかは、行為者の持つ欲求の動機の強さによって決まる。意志の弱い行為が生じるのは、価値評価と動機が乖離した場合である。

尤も、価値評価と動機とは、原理的に完全に独立したものではない。ある行為を価値あるものとして評価することは、通常、それを行いたいという動機を持つことを伴うからである。むしろ、両者がいかなる場合に乖離するかが、説明を要する事柄である。

価値評価とは一義的には、ある行為のよし悪しに関する判断である。しかし、価値評価が長期的な価値観や人生観といったものに基づくものである以上、われわれは自らの持つ欲求についても価値評価を与えないわけにいかない。なぜならば、ある行為が自らの価値観に照らして望ましからぬものであるならば、その行為への欲求もまた、

望ましからぬものと判断されざるをえないからである。このように価値評価は、自らの欲求に対する判断を伴い、したがってその意味で、フランクファートやブラットマンが強調したような二階の態度としての側面を持つ。

欲求とは、必ずしもわれわれの意に沿わぬものである。ある欲求は、行為者がそれに持ってほしくないほど強い動機の力を持つことがある。また逆に、別の欲求は、行為者がそれに持ってほしい強さの動機の力を持たない。意志の弱い行為が生じるのは、そのような場合である。

こうしたときわれわれは、強い欲求に動かされて望ましからぬ行為を行ってしまうという帰結を防ぐべく、さまざまな「自己コントロール」の手法を用いることができる。そして自己コントロールが行使される場合のいくつかにおいて、欲求を充足することと除去することの区別が重要なものとなる。

ある欲求が充足すべきものとみなされるか除去すべきものとみなされるかは、価値評価によって決定される。欲求された行為が、当の行為者の価値評価によって肯定されるものであるならば、その行為への欲求は充足すべきものとなる。行為が望ましからぬものである場合には、その行為への欲求は除去すべきものとなる。これは価値評価の二階の態度としてのはたらきである。

欲求を充足することと除去することには、形式的に見ると次の相違がある。Pを行いたいという欲求を充足するには、行為者はまさにPを行うしかない。それ以外の仕方ではその欲求を充足することはできない。それに対して、Pを行いたいという欲求を除去するには、必ずしもPを行う必要はない。その欲求を除去する手段は他にもあるかもしれないからである。

Pへの欲求を一瞬で除去してくれるような、欲求除去装置なるものが存在したとしよう。そのような欲求除去装置の使用は、自己コントロールの手法の一種とみなすことができる。Pを行う欲求の動機が、Pを行わないことへの動機よりも強いとき、行為者は、実際にPを行ってその欲求を充足することもできるし、欲求除去装置を使用してPを行わずにその欲求を除去することもできる。だがこのとき、当の行為者が後者の選択肢をとることができるのは、価値評価において、Pへの欲求を除去すべきものと判断した場合のみである。

欲求除去装置の存在は、いささかSF的な想定である。だが、われわれが実際に用いる自己コントロールの手法には、欲求除去装置と似たような仕方ではたらくものがある。われわれはそのような手法により、自らが意志の弱い行為を行ってしまう事態を回避することができる。そしてそのような場合つねに、欲求に対する二階の態度としての価値評価は、われわれの行為を決定するにあたって重要な役割を演じているのである。